

# 身体 現在 言葉——『ヴェニスの商人』

村 尾 敏 彦

近代化の歴史過程で久しく忘却されていた身体は、ヨーロッパではメルロ・ポンティ、日本では市川浩などの人々によって、20世紀哲学の場で新しく発見された。日本の演劇が身体を再発見したのは1960年代であった。1970年代初めに別役実は、「現代演劇は、従来の新劇がそうであった様な、文学の演劇的展開に過ぎないものから、次第に演劇的直接性を開拓しつつある」と述べた。観客にとっての〈いま・目の前〉の舞台空間、そこに立つ役者たちの身体から演劇はつくられる、という主張がそこにあった。

舞台空間にダイナミズムをもたらす要素はいくつもあるが、本論では、21世紀において上演されるべき『ヴェニスの商人』を考察するにあたって、とりわけふたつの要素に注目する。ひとつは、そこに存在する身体である。舞台上では役者の身体が、立ち座り横たわり、あるいは歩き、ころがり、移動する。悲しみ喜び怒ることは身体の内部から外部へとあふれ出る運動である。複数の身体が近づき離れていく、それらが関係を生み緊張し弛緩する。こうして演劇空間が息づき、拡張し収縮し、開き閉じ、分割され統合されあるいは融合される。

もうひとつは、演劇と世界との関係が呼び寄せるアクチュアリティである。役者・演出家・舞台美術家・照明家など演劇を作る側だけでなく、観客もまた世界史的現在を生きている。そのため戯曲と舞台から生み出される物語は、様々な外部のテキストを引き寄せる。こうした間テキスト性によって、演劇空間は多軸化、複合化する。役者の身体はすでに現代を体験して知覚的思い出を蓄積した身体である。何かを演じるとは、それが呼び覚ます知覚を再び生きる

ことでもある。観客もまた、身体の共振において演劇空間を共有するときに、その物語の時空を生きると同時に、自分自身の現存在をあらためて生き直している。

## I

戯曲を読むとはどういうことであろう。登場人物のそれぞれのセリフが黒い活字の列となって、紙の白い余白に囲まれている。文学として戯曲を読むとき、ひとつひとつのセリフは深い空白の上に張られた細いロープであり、読者は次のセリフへと飛び移るためには、空白を意味や心理や情景で埋めなければならない。しかし演劇として戯曲を読むなら、深い空白から役者たちの心身の運動が現れ出て3次元の演劇空間が立ち上がる。

『ヴェニスの商人』の第1幕第3場に、演劇空間が息づき始めるようすをみつけることができる。冒頭のシャイロックとバッサーニオとのやりとりは単調なセリフからなっている。

シャイロック 3000 ダカット、んーん。

バッサーニオ ええ、そうです。3 か月。

シャイロック 3 か月、んーん。

バッサーニオ すでに言ったとおり、アントーニオが責任をもちます。

シャイロック アントーニオが責任を、んーん。

バッサーニオ 助けてくれますか？ 安心させてくれますか？ 答えてもらえますか？

シャイロック 3000 ダカット、3 か月、アントーニオが責任を。

バッサーニオ 答えは？

シャイロック アントーニオはいい。

バッサーニオ 悪い評判を聞いたことがありますかね？

シャイロック ああっ、いや、いや、いや、いや。私が言うのはね、．．．

この場面の直前に、バッサーニオはシャイロックに借金の条件を説明しているらしい。ふたりはただ、相手が発話した言葉を繰り返しているにすぎないようにみえる。ここでのふたりのセリフには、ストーリーの展開を促すような内容はない。観客にとっても、すでに第1場でのアントーニオとバッサーニオの会話から知っている情報の繰り返しにすぎないのだ。だが、演劇として大切なのは、あえて繰り返すことを二人に強いている事情である。バッサーニオはポーシャに求婚するためにお金が必要なのでなんとしても借金したい、シャイロックを軽蔑しているにもかかわらず、取りすがりたいほどである。シャイロックは金貸しとしての商売にたずさわっているのだが、バッサーニオ以上にアントーニオのことが気になっている。シャイロックはアントーニオを憎んでいるのだ。空間的にも心理的にも、バッサーニオが近づこうとしても、シャイロックはふたりの距離を保とうとするだろう。

シャイロックはどうすればいいのか方針がはっきりしないまま、より有利な条件を引き出そうと考え、相手の事情を正確に掴もうとしている。シャイロックは、すでに聞いたバッサーニオの言葉を繰り返して相手をじらしながら、こちらの腹を探り当てられないように慎重に言葉を選んでいる。舞台上ではふたりの役者の身体はおそらく向かい合っていない。バッサーニオを演じる役者は、シャイロックに身体を正対させて、まっすぐに言葉をシャイロックに向かって発するかもしれない。もしもシャイロックが普通に借金に応じるつもりだったなら、正対してバッサーニオを受け止めながらセリフを発するだろう。しかしこの場面では、シャイロックはむしろ、バッサーニオに対して身体を斜めに構えるか、背中でバッサーニオの直線的な訴えかけを遮るかして、身体を閉ざしているだろう。単なる繰り返しというじらしの餌に、バッサーニオは見事にはまり食いついてくる。「助けてくれますか？」と懇願しかねないありさまだ。もはや、条件はシャイロックの思いのままだ。だが、さらにじらして、相手の言葉を繰り返す。バッサーニオはたまたま「答えは？」とせきこんでくる。

ふたりの身体の関係が、ズレと軋みを演劇空間にもたらすだけではない。こ

こでのバッサーニオの息は速く浅く、身体は重心が浮き上がった落ち着きのない状態であろう。シャイロックの発話を聞くと、すぐにあわてて発話したり、相手のようすをうかがって過剰に反応することだろう。シャイロックは深い息でゆったり発話し、身体の重心は低いだろう。しばしば考え込むように間を置くかもしれない。このふたりの身体が、対位法的コントラストを演劇空間に与える。

次のシャイロックのセリフは見事だ。「アントーニオはいい」(“Antonio is a good man.”)。バッサーニオは good を「善良な」という意味に理解して返事をする。アントーニオは同じキリスト教徒コミュニティに属する友人たちとの交流を大切にして、仲間たちがユダヤ人の高利貸しに苦しむ時には救ってやり、バッサーニオに対しては友として慈しみ金銭的に援助してきた。バッサーニオを演じる役者はそれまでとは調子を変えて、シャイロックに挑みかかってもいい。だが、シャイロックからすれば、アントーニオは高利貸しの商売の邪魔をする敵である。シャイロックにとって、「アントーニオはいい」とは、あくまで高利貸しの保証人として十分な財産を持つ人物であるという意味なのだ。「ああっ、いや、いや、いや、いや」(“Ho, no, no, no, no”)を、シャイロックを演じる役者は、バッサーニオの無知を嘲るように得意げに発してもいい。また「善良な」という意味を否定する快感や、バッサーニオを虜にした自信から、初めてバッサーニオに身体を開き正対するかもしれない。

だが、バッサーニオの発した言葉を繰り返しているとき、シャイロックは少しだけずらして繰り返している。バッサーニオの「きつと、証文をアントーニオと取り交わせますよ(“Be assur'd you may”)」に対して、シャイロックは「きつとそうだな(“I will be assur'd I may”)」と言う。このときの assur'd は同じ意味を繰り返すだけだが、シャイロックが続けて発話して「そしてきつと保証してもらえらるだろう(“and that I may be assured”)」と言うとき、assured は金銭の取引にかかわる保証人としての意味へとずらされている。バッサーニオが「よかったらいっしょに食事を」と言うと、「はい、豚肉の匂いを嗅いで、ナザレの預言者が悪霊を呼び出して入れた豚を食べてね」とシャイロ

ックは答える。食事の話に同意して繰り返すと見せかけて、実は皮肉へと反転させている。イエスの逸話に言及することで、バツサーニオやアントーニオが信仰するキリスト教をあてこすっている。悪霊が入り込んだあの豚を、おまえたちキリスト教徒は平気で食べている、我々ユダヤ教徒には信じられない話だ、といった趣旨である。

この場面冒頭の「3 か月、んーん。」「アントーニオが責任を、んーん。」といったシャイロックのセリフもまた、バツサーニオのセリフを繰り返しながら、バツサーニオの意図と情緒を斜めにずらしながら発している。シャイロックがセリフの最後に差し挟む「んーん (well)」は、次の瞬間いつでも否定へと反転しかねない。シャイロックは声に出した文字通りの言葉の意味の背後に、別な言葉をひそませているように感じられる。これは、キリスト教コミュニティが支配するヴェニスで、シャイロックが少数派であるユダヤ教徒として生き延びるための話し方であるらしい。相手の言葉に沿いながら返答するために声へと意味を押し出していく動きに対して、その反作用のように身体へと隠される何かこそ、演劇的直接性として表出されるべきなのだ。

シャイロックとアントーニオが話していると、アントーニオが近づいてくる。アントーニオを見つけた直後のシャイロックの独白は、シャイロックがそれまで語らなかった言葉、心の中の言葉を観客へ打ち明ける。「なんてしっぽを振る徴税吏みたいに見えることか (“How like a fawning publican he looks!”)」と語るとき、アントーニオが金を貸してもらうためにシャイロックに対して尻尾を振るかもしれない、という期待が語られる。そして「徴税吏みたいに見える」は、高利貸しの異教徒シャイロックをいつも軽蔑して唾を吐きかける、アントーニオの傲慢さを言い表している。さらにアントーニオへの憎悪を独白するのだが、バツサーニオが「聞いているか？」と問うと、「おれの蓄えの勘定をしていたところだ」とごまかす。アントーニオには「あなたへの尊敬の念を話していたところだ」と言い、独白とは正反対のことを言う。シャイロックのこの独白は、現代の劇作家なら省略したかもしれない。言葉にして説明するよりも、役者がセリフ以外で表現する方法を選択しそうである。シャイ

ロックは、アントーニオから話しかけてくるのを期待しそっぽを向いて知らん顔をしているかもしれない。あるいは、全身を緊張させたすぐ後に満面の笑みを浮かべてアントーニオの反応を観察するかもしれない。

近づいてくるアントーニオに気づかないふりをしてバッサーニオに語りかけ、シャイロックは「何か月だったかな？」とまたもや繰り返す。アントーニオのようすを探っているのだ。アントーニオは、自分が金を貸す時には利息を取らないと宣言する。アントーニオはまったくシャイロックに媚びようとはしない。「しっぽを振る徴税吏みたいに」とシャイロックは期待したのに、アントーニオはシャイロックに対してまったく尻尾を振ろうとはしない。アントーニオはいつもどおりシャイロックを見下ろし堂々と語り、シャイロックを軽視するかのように、今度はバッサーニオに金額を伝えたかと質問する。シャイロックは金を貸す立場にいるからには、アントーニオに尊重され注視されたい。バッサーニオの返事を遮るように「ああ、3000 ダカットだな。」と答える。それを受けてアントーニオは畳みかけるように期間についてあっさり断言する。シャイロックはまたもや「忘れてた、3か月だった」と、しらばっくれる。先ほどバッサーニオをうまく毘にかけて自分のペースに巻き込んだように、アントーニオをも翻弄してやりたいのだ。そして何より利息の正当性について、アントーニオを説得したい。バッサーニオとふたりでいた場面と違って、シャイロックは重心が浮き上がり落ち着きを失うだろう。

アントーニオに向かって高利貸しを擁護しようとして、シャイロックは『旧約聖書』のヤコブを引き合いに出す。『旧約聖書』30章によれば、伯父ラバンのもとで働いていたヤコブは、自分の故郷に戻りたいと言う。ラバンは自分の元にとどまってくれるように頼み、報酬を与えることを提案する。ヤコブは、ラバンの家畜をいままでどおり世話をしてやる代わりに、ぶちとまだらの羊・山羊をくれるように言う。ラバンは、自分の家畜の中からぶちとまだらの羊・山羊を取り除いてヤコブに委ねる。ヤコブは、生木の枝から皮をはいで白い木肌の縞をつくり、家畜が水を飲みにくる水ぶねに入れた。家畜たちは、水を飲みに来て孕み、縞のある仔たち、まだら、ぶちの仔たちを生んだ。ヤコブはこ

れらを自分のものとした。

シャイロックは、家畜に仔を産ませてそれを手に入れる行為に、利息を手に入れる高利貸し行為をなぞらえた。それに対して、アントーニオは納得しない。アントーニオに言わせれば、ヤコブの行為は投資であり、神の恵みによって家畜の仔を得たのだ。それは利息ではない。アントーニオは商人であり、船と乗組員に投資して、外国貿易によって利潤を得ていた。

ヴェニス外国貿易の拠点であり、アントーニオのような商人の国である。シェイクスピアが生きていた英国社会はまだ資本主義が未発達で、封建的中世と近代とが混ざり合っていた。国家はイングランド国教会を国家の宗教としていて、いまだ宗教性を帯びており、ユダヤ教徒は追放されていた。エリザベス女王は政治的かつ宗教的カリスマとして愛国心を煽っていた。だが、その時代にすでにヴェニスは共和国制度の都市国家であった。そこではまだ産業資本主義は生まれていないものの、商業資本が世界的運動を行い、国家は少なくとも名目上は宗教性を脱却しており、ユダヤ教徒も暮らすことができた。個人は私的所有の権利を保障され、契約が尊重され、夥しい交換が商品と貨幣の交通を促していた。

しかし、アントーニオは利息を取って金を貸すことが許せない。アントーニオにとって、金銭は不妊の女性に例えるべきなのだ。貨幣は物に過ぎない、使用価値をもたずただ交換価値をもって物と交換されるだけだ。生き物でないのだから、仔を孕むはずがない。貸すだけで金銭が増大するのは不合理である。

第1幕第3場では、まずアントーニオとシャイロックの2人だけの対話の場面があり、次にアントーニオが登場して3人の場面が現れる。こうした構成が演劇空間にダイナミズムをもたらしている。2人の場面ではシャイロックが優勢だが、アントーニオが現れると劣勢になる。シャイロックはアントーニオを説得できない。シャイロックは守勢にまわり追いつめられる。ついには、あからさまに不快さを口にする。自分の所有する金の使い道について他人に文句を言われる筋合いはない、という論旨で利息を正当化しようとする。私的所有の権利は、商人アントーニオにとっても前提となる権利である。だが、アン

トーニオはまったくひるまない。友だちに対してではなく、敵に対して金を貸せ、と言いつける。この場面は3人の身体が舞台上に三角形をつくって、演劇空間を動かす。アントーニオとバッサーニオとがつくる2点が、シャイロックの1点を挟んでますます圧力をかけていき、三角形が緊張し演劇空間がシャイロックへと収縮して、ついに憎悪の結晶体が絞り出される。

シャイロックが、肉1ポンドの違約金を決意する。シャイロックを演じる役者は、どの瞬間に決意するのかを明確にしなければならないだろう。この決意はシャイロックの心身状態を大きく変化させることだろう。アントーニオに対するスタンスがある境界を超えたのだった。自尊心を傷つけられ、異教徒としての反発が膨れ上がり、憎しみが血なまぐさいものを生み出したのだ。だがそのことをシャイロックは隠さねばならない。シャイロックが使う言葉は、「友たち (friends)」「親切 (kindness)」「友情 (friendship)」である。金を借りる立場になっても相変わらず攻撃的で高飛車なアントーニオに、アイロニーでしか反撃できない。シャイロックは、アントーニオが使った言葉 friends を繰り返して「あなたと友だち (friends) になりたいと思って、利息なしに貸そうとしていたのに、．．．これは親切 (kind) からなのに」と言う。バッサーニオが「これが親切 (kindness) でありますように」と言うと、シャイロックは kindness を引き取って繰り返した上で、違約金代わりの肉1ポンドについて説明する。それを聞くと、アントーニオは借金の条件に同意してさらに kindness という言葉を繰り返す。3人とも kindness という言葉を使いながらも、シャイロックが親切であるとは誰も思っていない。バッサーニオはシャイロックの条件に不安をもっているが、アントーニオは期限の3か月よりも1か月早く船がヴェニスに到着することを、ひたすら信じ込んでいる。だが、3人は実に陽気に楽しげに kindness という言葉を発することだろう。まるで一輪の赤いバラの花を差し出すように。

セリフの中の地口が、役者の身体を通して演劇空間を動かすことがある。第3幕第1場では、サリーリオとサレーニオが、アントーニオの船が難破した噂について話し始める。長々と話し続けるサレーニオに対して、「さあ、終わり



にしる (“Come, the full stop.”)とサリーリオが言う。それに対して「結論は、アントーニオが船一隻失ったってことだ (“the end is, he hath lost a ship”）」とサレーニオが言い返す。すると「アントーニオが失うのは、これで終わりだといいいのだが (“I would it might prove the end of his losses”）」とサリーリオが答える。ここでの地口は stop を end へとずらして end を軸にしてつくられている。サレーニオは、end を「結論」の意味で発話しているはずだが、サレーニオのセリフは「アントーニオが失ったのは、一隻で終りだ」とも理解できる。そこでサリーリオは、end を「終り」の意味で発話している。『ゴドーを待ちながら』でウラジミールとエストラゴンが、互いに相手の頭に載っている帽子を奪って自分の頭に載せる動作を続ける場面がある。サリーリオとサレーニオは、end という語を相手のセリフの文脈から奪い取って自分の文脈に載せている。サレーニオのセリフの声の調子と息とを引き継ぎながら、サリーリオは end という語を声でつまみあげなければならない。身体の延長としての声が、相手の頭の帽子を奪う手のような動きをしている。

シャイロックがやってくると、サレーニオは「悪魔がくる」とサリーニオに言う。サリーリオとサレーニオは、娘のジェシカがローレンゾーと駆け落ちすることをあらかじめ知っていたはずだと、シャイロックは文句を言う。ここからは、サリーリオとサレーニオが、シャイロックを相手に、地口の戦いを始める。まず dam という語が、争点あるいは戦場となる。「シャイロックは娘に羽根が生えていたのに気づいていたはず、すると母鳥 (“the dam”）」から逃げ出すのは自然なことだ」とサレーニオは言い返す。すると「だからこそ、娘は呪われているのだ (“She is damn'd for it”）」と、シャイロックは相手の dam を捕えて damn'd へとずらしながら反撃する。まるで、敵の武器を奪い取って相手に振りかざすように。

シャイロックは「おれの血と肉が反抗するなんて! (“My own flesh and blood to rebel!”）」と嘆く。「おれの血と肉」とは娘のジェシカのことである。それに対して、サレーニオが flesh and blood の意味内容をずらしながら攻撃する。「その歳で血と肉が反抗するのか (“rebels it at these years?”」)

というセリフで、サレーニオは「情欲」の意味に切り替えている。攻撃する側の得意げな動き、やられた側の受動と反発、それに対する攻撃した側の反応、こうした両者の関係の中で、波が伝わり合い演劇空間が揺さぶられ、法廷での対決へ向けて緊張が積み上がっていく。

岩井克人の著書『ヴェニス of 商人の資本論』は、ポーシャ、ネリッサ、ジェシカの3人の女性を貨幣になぞらえて、登場人物を三つのグループに分けている。兄弟的連帯によって結ばれたキリスト教徒のコミュニティ、ヴェニスの空間的内部にしながら外部を形成するユダヤ教徒、両義性に満ちて媒介的役割をもつ女性たち=貨幣である。たとえば、ジェシカはユダヤ教徒コミュニティに属していたが、そこから離脱してローレンゾーが所属するキリスト教徒コミュニティへ移動する。駆け落ちのときには、男に変装しなければならない。ちょうど外国貿易において、西インドで金貨が砂糖に変身し、ヴェニスに戻ると再び金貨に姿を変えるように。

岩井克人は、以下のように資本の運動を分析している。利潤とは、異なる価値体系の間にある差異から生み出される。商業資本主義は、地域的に離れたふたつの共同体の間の価値体系の差異を媒介にして利潤を生みだす。貨幣の貸し借りとは、現在の貨幣と未来の貨幣とを交換する行為であり、利子とは二つの時間の間の差異から生み出される価値である。つまり、アントーニオは外国貿易によって、空間的な差異から利益を得ている。それに対して、シャイロックは高利貸しによって、時間的差異から利益を得ている。アントーニオは貨幣や商品のフェティッシュな運動によって私的所有を増やしていたが、3000ダカットの借金ではむしろ貨幣によって生命を脅かされ翻弄された。シャイロックは、私的所有物である金銭を金融資本として動かすつもりが、逆に金銭の運動にのみ込まれ捕りつかれて守銭奴となり、3000ダカットを貸した件ではついには恐るべき体験をすることになった。シャイロックは「自分の金に子を孕ませる」と言って利息によって稼ぐことを宣言したが、シャイロックの喩は、貨幣のもつフェティッシュな不可解な動きを語っている。

シャイロックの発した言葉 *flesh and blood* は、その発話の瞬間シャイロッ

クにとっては、私的所有物のように自分の意図に従うべきものに思えたであろう。ちょうど、ジェシカを、自分の血肉から派生し自分の命令に従うべき所有物だと考えたように。金銭を高利貸しに使うことについて、自分の所有物を自分の好きなようにするのは当然の権利であり他人はこの行為に侵害できない、とシャイロックは主張している。シャイロックは *flesh and blood* を選択して「自分の娘ジェシカ」を指示対象として結合し、相手に向けて自分の言葉として発話した。ところが、サレーニオによって *flesh and blood* は奪い取られ「情欲」を指示するように変形されてしまった。所有物と思っていたジェシカがシャイロックの意思に従属しなかったように、自分の言葉もまたシャイロックの意思から羽ばたき逃れる。言葉もまた貨幣のように、もともとの所有者あるいは発話者の意図を超えて勝手な動きを始め、とめどない変成を行う。あてにしていた短期の投資資本が突然に市場から引き上げることで、その社会の経済が大不況に陥るように、シャイロックは裁判の際に証文の言葉に見捨てられるのだ。

## II

2001年9月11日に事件はニューヨークで起こった。2機の民間航空機が世界貿易センタービルに衝突し、1機がアメリカ軍の軍事中枢であるペンタゴンに衝突した。およそ3000人の死亡者を出したこの事件の後、アメリカ政府は、19名のイスラム原理主義者のテロリストによってこれらの航空機がハイジャックされ、テロリストたちが操縦して世界貿易センタービルを攻撃した、と発表した。さらに、この攻撃は、オサマ・ビン・ラディンをリーダーとする組織アルカイダによって計画・実行されたと断定し、当時アフガニスタンに潜伏していると見なされたオサマ・ビン・ラディンを引き渡すように、タリバン政権に要求した。この要求に応じなかったタリバン政権に対して、アメリカは英国とともに10月7日から爆撃を開始し、およそ2ヶ月間にタリバン政権は崩壊した。

9.11 事件を発端にして、アメリカ政府はある文脈を作り上げた。それは、自由と反テロの旗の下に集まった諸国によって反テロ戦争を遂行するというものだった。イラクへの侵攻は、国連の安全保障理事会で武力行使容認決議を採択することなしに行われた。だが、アメリカ政府が容疑者として捜査を続けているオサマ・ビン・ラディンは、2004年4月15日に声明を発表し9.11事件について語るなかで、アメリカ政府とは異なる文脈を提示した。1982年のレバノン戦争のさいに破壊されたレバノンの高層ビルを見たとき、9.11事件のアイデアを思いついた、とオサマ・ビン・ラディンは言う。

1982年、パレスチナ解放機構（PLO）の攻勢への報復のために、イスラエルは隣国レバノンに侵入し首都ベイルートを占領した。PLOは抗戦したがついに停戦に応じ、アラファトが率いるPLO指導部と主力部隊はチュニジアに追放された。オサマ・ビン・ラディンによれば、アメリカとイスラエルの同盟により、パレスチナとレバノンの人々はひどい圧政に苦しんでおり、このとき西ベイルートの高層アパート群がイスラエル軍によって爆撃された。

アメリカはイスラエルにレバノンの侵攻を許し、その支援に第6艦隊を差し向けた。彼らは大勢の人々を爆撃し、殺害し、危害を加えはじめ、恐怖のために逃げだす人々も出た。私はいまだにあの悲惨な光景を記憶している。血、ちぎれた手足、虐殺された女性や子供たち。そこかしこで家々が破壊され、高層ビル群が倒壊し、その住民が生き埋めになるなかで、爆弾の雨がわれらの家々をめがけて無情に降り注いだ。まるで、ワニに食われつつある子供がなすすべもなく叫ぶのを見るようだった。世界中がこの成り行きを見開きしていながら、何の手も打たなかった。この危機的な瞬間に、私の心にくっつか考えが浮かんだ。それらにより、表現するのは難しいが、不正を取り除きたいという強烈な衝撃、攻撃者を罰しようという固い決意が抑えきれなくなった。

私は、レバノンの破壊された高層ビルを見たとき、攻撃者に同じ仕打ちをすること、つまりアメリカの高層ビルを破壊することを思いついた。

〔『オサマ・ビン・ラディン 発言』342〕

ユダヤ人がイスラエルを建国して、それまでその地に住んでいたパレスチナ人が難民になって以来、両者の対立は続いている。オサマ・ビン・ラディンが提起する文脈は、イスラエルによるパレスチナ人への抑圧をアメリカが支持し続けた、というものである。オサマ・ビン・ラディンにとって重要なのは、イスラム教への信仰である。イスラム教徒パレスチナ人への抑圧に対してともに抗議し、異教徒に対して報復すべきだと、オサマ・ビン・ラディンは主張している。

9.11 事件の理解についてはアメリカ政府陰謀説さえあるが、この事件を意味づけようとする主要なふたつの視点は、ブッシュとオサマ・ビン・ラディンが提出している。このように対立するふたつの文脈、ふたつの物語が存在して、現実での対立に対応している。オサマ・ビン・ラディンの物語に対して、アメリカの物語を差し出すのはブッシュ大統領である。9.11 事件の当日、ブッシュは「アメリカが攻撃のターゲットになった理由は、我々が世界における自由と機会のもっとも輝けるかがり火であるからだ」(“America was targeted for attack because we’re the brightest beacon for freedom and opportunity in the world.”)と語っている。2002 年の声明「アメリカ合衆国の国家安全戦略 (The National Security Strategy of the United States of America)」では、ふたつの論点がセットになって主張された。一つは、全世界に及ぶテロリスト達との戦争を遂行すること。もう一つは、自由市場と自由貿易の促進である。ブッシュによれば、自由こそもっとも重要な価値であり、テロは自由を脅かすものである。市場や貿易で自由を実現することによって、経済成長、収入の増大、新しい雇用がもたらされ、自由が強化されるはずだ、とブッシュは主張した。

オサマ・ビン・ラディンの物語は、アメリカに抗議する者とアメリカを支持する者、イスラム教を信じる者と信じない者との二分法が支配している。ブッシュの物語は、自由を信じる者と信じない者との二分法が支配している。そし

て両者ともが、世界の人々と国々に対して、二分法のどちらかを信じるように選択を迫る。ふたつの物語は、鏡像のようによく似た性質をもつ。両者とも、それぞれに自分の世界像に閉じこもり、相手の住み着く世界像を幻影として拒否している。

アメリカの罪のない市民が9.11事件によって殺害されたことについて質問されると、オサマ・ビン・ラディンはこのように答えている。

アメリカ人やその他の教育ある人びとが、罪のない市民の殺害などと言い出すのは、非常に奇妙なことである。つまり、われらの子供、市民は罪のある者で、その血を流すことは許されるとでも言うのか。われらが彼らの市民を殺せば、全世界でわれらへの抗議の叫びがあがり、アメリカはその同盟者及び傀儡に圧力をかけはじめる。われらの血は血でなく、彼らの血は正真正銘の血であるとも言うのか。この数十年にわれらの地で殺された人々のことはどうなるのか。イラクでは百万人以上の子供が死亡し、死傷者はいまだに増えているが、それに大声で抗議する者、慰めの言葉を言う者、哀悼する者がいないのはなぜだろう。(176)

このオサマ・ビン・ラディンの言葉によく似たセリフを、シャイロックは語っている。第3幕第1場始めに、サレーニオとサリーリオが話している。ふたりはアントーニオ、バッサーニオの友人で、アントーニオが船を失ったことを心配している。そこにシャイロックがやって来る。シャイロックの娘がロレンゾと駆け落ちして、家を逃げだしたことに話題が及ぶ。さらに、アントーニオの証文に書かれている肉1ポンドを手に入れても何の利益にもならない、と言われて、シャイロックは何故アントーニオから違約金代わりに肉1ポンドを切り取ろうとするのかを語る。

魚釣りの餌にはなるさ、そうでなきゃ、おれの復讐心の餌にはな。・・・  
 ・ ・ ・なぜあいつがあんなことをするのか？おれがユダヤ人だからさ。・・・

・もしおれをちくりとやっても血が出ないだろうか？くすぐっても笑いださないだろうか？毒をもって死なないだろうか？ひどいことをされて復讐しないだろうか？他の点でおまえたちキリスト教徒に似ているとしたら、復讐についても同じなんじゃないか？もしもユダヤ人がキリスト教徒に悪事を働けば、どうなる？復讐さ。もしもキリスト教徒がユダヤ人に悪事を働いたらどうする、キリスト教徒をお手本にすれば？——復讐だ。おまえたちが教えてくれた悪行をやってやる、もっとうまくやってやるよ。

このシャイロックの復讐の宣言が現代世界に投射されて生まれる反響音の中に、イスラエル建国から始まる殺戮と報復の連鎖を、9.11 事件、アメリカによるアフガニスタンやイラクへの侵攻を、聞き取ることができるであろう。ヨーロッパにおいて排斥され抑圧されたユダヤ人が背負っていた重荷が、第二次大戦以降はイスラム教徒へと移されてしまったように見える。

アントーニオはブッシュに似ている。第1幕第3場で3000ダカットの借金についてシャイロックとやりとりするさい、アントーニオは居丈高に宣言する。「これからも同じように、おまえを犬と呼ぶ、おまえに唾を吐きかける、おまえを蹴とばしもしよう。もしもおまえが金を貸すなら、友だちに貸すようにではなく……おまえの敵にするように貸せ。」ここにあるのは、憎しみというよりも軽蔑である。アントーニオはキリスト教的友愛を潤滑油とするコミュニティしか尊重していない。外部のユダヤ教徒コミュニティに対しては、その価値を認めない。ブッシュは自由への信仰によって自らの行動に価値を賦与し、その返す手でアメリカに対立する者たちをテロに加担する者と断定し唾を吐いている。

劇中の法廷に集まった人々は、みなアントーニオに同情している。キリスト教徒コミュニティが多数を占めるヴェニスでは、ユダヤ教徒のシャイロックよりも富裕な商人であり、気前のいいキリスト教徒アントーニオに人々は味方する。だが、シャイロックの訴えによって法廷を開かなければならない、これはヴェニスの政治権力が、個別の民族共同体を超えた普遍性を実現しているから

である。諸外国との貿易で富を集積して栄えている都市国家としては、あらゆる住民たちに最低限の権利を普遍的に認めなければ、自らを維持できないのだ。アントーニオも、合法的なやりかたで自分の生命の危険を逃れることはできないと言う。法廷に集まった人々は、慈悲をシャイロックに求める。法と正義ではアントーニオを救えないと判断したからである。そしてポーシャもまた、同じように慈悲を求める。

いつも少数派ユダヤ教徒として蔑まれ抑圧された社会生活をおくっているシャイロックが、おそらくは初めてキリスト教徒たちと対等な権利をもって立っている。シャイロックは法廷という普遍的な場で、初めて対等な人間として、呼吸し、声を発し、歩き見つめている。若者のように鼓動が血管を駆け巡り、初めての澄んだ世界をためらいがちに生きている。公爵、バッサーニオ、グレンシアーノ、ポーシャが訴訟を引っ込めるように求めるが、シャイロックは押し返す。ここでの演劇空間は、アントーニオという静止点をめぐって、対立する二つの力点がせめぎ合い、シャイロックが優勢となる。シャイロックは、驚くべき世界を生きている。自分の言葉がキリスト教徒たちを追い詰めているのだ。言葉がその意味そのままにまっすぐに、キリスト教徒たちの言説を打ち倒しているのだ。いつもの自分の言葉とは違う。相手の言葉に沿うようなみせかけの陰で自分の言葉をこっそりくびり殺したり、もってまわった言い方で背後から皮肉の針を相手に刺し貫く、そうした言葉の戦略がシャイロックの日常であった。言葉が矢のようにまっすぐに飛ぶことを、ヴェニスの社会的磁場はこれまでシャイロックに許さなかった。シャイロックに押し寄せ動かそうとしたキリスト教徒たちは、シャイロックの予想外の力によって周辺へと押し戻される。契約上の債権者として起こした訴訟を、ヴェニスの権力が正当と認めようとしているようにみえた。

ところが、ポーシャが「血を流してはいけない、肉の量が1ポンドきっかりでないといけない、さもないと死刑だ」、さらに「ヴェニス市民を殺害しようとした者は、財産を没収される」と宣言する。このとき、シャイロックは法廷においてもキリスト教徒たちと対等に扱われていないことに気づく。シェイ



クスピアの描くヴェニスの国家権力はまだキリスト教への宗教的偏向から完全には脱していない。バツサーニオ、グレンシアーノを始めとするキリスト教徒たちは突然に優勢となり勝ち誇る。シャイロックは敗北した。

シャイロックはあっさりと言い切る、「おれの命もすべて奪え、赦したりするな。おれの家を支える柱をおまえたちが取れば、おれの家を取ったってことだ。おれの生活手段を取れば、おれの命を取ったってことだ」と。追い討ちをかけるように、アントーニオはシャイロックに対してキリスト教徒に改宗することを要求する。キリスト教徒たちからすれば、慈悲に満ちた要求なのであろう。だが、ユダヤ教徒にとっては自己のアイデンティティーを剥奪しようとする屈辱的な要求である。ポーシャはとどめを刺すように言う。

ポーシャ：満足したか、ユダヤ人、何か言うことがあるか？

シャイロック：満足です。

ポーシャ：書記、譲渡の証書を作りなさい。

シャイロック：ここから退室する許可をお願いします。具合がよくないので。証書は送ってください。署名しますから。

シャイロックは語るべきことを語り終え、聞くべきことを聞いた。法廷で慈悲を求めたポーシャに対して、正義だけでいい慈悲はいらない、ただ証文通りに抵当を手に入れたい、とシャイロックは反論し続けていた。したがって、ポーシャの「満足したか (“Art thou contented Jew?”)」は、希望どおりになって満足であろう、という皮肉である。シャイロックはこれまでの日常の話し方にもどって、「満足です (“I am content”)」と返答する。ポーシャの使った語 *content* を繰り返しながら、シャイロックはいままでの自分に戻ったと感じているのだろうか。ポーシャの冷静で残酷な皮肉に対して、シャイロックの身体はどう反応するだろうか。失った財産への苦い思いが身体じゅうの血管に逆流しているだろうか。ヴェニスという国家は、契約の尊重も市民の権利の普遍性もユダヤ人に対してはキリスト教徒ほどには認めなかった。シャイロックが生

きてきたこの世界の真実が、あらためて露呈したのだ。シャイロックは小さな石のように収縮していくのだろうか。シャイロックは寡黙である。シャイロックの最後のセリフは、まるで終業時間に事務机の上にあるパソコンをシャットダウンする手つきのように、無表情である。身体の底からあふれ出ようとする言葉を封印するために、その場に適合する機械的な言葉を並べている。セリフによって蓋をされた何かこそ、演劇空間で表現されるべきものであろう。

シャイロックが退室するさまを、他の登場人物はどう感受するだろうか。勝ち誇り嘲笑して見送るのか、シャイロックの姿に不気味さを感じて息をのむのか、助かったアントーニオに駆け寄って無視するのか。シャイロックは舞台を退場するさいに、疲労してよろけながら歩くのか、怒りに沸騰する胸を抱えて足早に去るのか、振り向いた姿には残忍な笑いが見えるのか。いずれにせよ、この場面をどう構築するかは、この劇全体の演出プランにとって重要な要素となるであろう。このあとシャイロックがどうしたのか、戯曲には書かれていない。問題はシャイロックの沈黙である。テロを巡るオサマ・ビン・ラディンとブッシュの言説は事態を適切に解明しているとは考えがたい。むしろ両者の言説の裂け目、テロや戦争によって死亡した人々の舌の奥に凍結したままの言葉こそが、状況を真に言語化しうるように思われる。そのように、キリスト教徒たちの権力と言説によって不可能にされた言葉、シャイロックの沈黙こそ、『ヴェニスの商人』の舞台が表現すべき核心であろう。

何の罪もない人々を無差別に殺害する暴力は、日本にもある。2008年6月8日、東京の秋葉原の歩行者天国で一台のトラックが人の列に突っ込み、トラックから降りた男は通行人に次々とナイフを突き立て7名が死亡した。現行犯逮捕された容疑者Kは、警視庁の取り調べに対して、「今日は殺すために秋葉原にきた。世の中がいやになった。誰でもよかった。」と語った。この暴力に先立ってK自身が携帯サイト上で自らの犯行を予告し動機を説明している。事件の後では、殺傷の動機や事件の意味を巡って、ネット上でも印刷体によっても様々な言説を生み出した。

解釈者たちは、Kの言葉を受肉させ、「家族の崩壊」「社会的孤立」「派遣労

働」などのキーワードをてこにして、ひとりの人間の姿を作り出そうとする。マスコミによると厳しすぎる両親との親子関係は破綻しており、携帯サイトの書き込みに、K は両親を殺したいと述べている。だが、彼は両親を殺害しなかった。K は携帯サイト上で、自らを不細工と呼び、友だちや恋人がいないと嘆いた。だが、恋人をもつ「イケメン」の男たちや、自分をふった女性を殺害のターゲットにしたわけではない。収入の少ない派遣社員であるため、人々は自分を相手にしないのだ、と彼は言う。アメリカ政府が新自由主義経済を世界へ広げようとした結果、日本政府は規制緩和を推し進め、21 世紀に人材派遣会社が急成長した。かつて大多数の人々が中流意識をもっていた日本社会には、新しい富裕層とワーキング・プアーが生まれ、「勝ち組」と「負け組」という名称が流行し、格差社会と呼ばれるようになった。秋葉原での無差別殺人容疑者 K も、世界経済の大きな変化のうねりにのみ込まれ、不安と無力といらだちに追い詰められたようだ。だが、K は人材派遣会社や派遣先の工場に暴力を向けたわけではない。

彼は世界の総体を敵にしたらしい。その孤立は、家族も財産も失いユダヤ教の信仰さえ奪われたシャイロックの孤独を想起させる。K は不特定の現実総体に攻撃を仕掛けた。標的も決めず、正当化のメッセージもなく、ただ殺した。その出発点においても、その目標においても、もっとも孤独なテロ行為である。だが、事件のあとインターネットへの類似の犯行予告に対する摘発は、事件が起きた 8 日から 29 日までに計 30 人に上った。K の孤独は日本社会に繁茂しているようだ。

携帯サイトに残された言葉は、舞台上で役者が独白するセリフに似ている。「不細工で女にもてず、恋人も友だちもいない」という男の役を、K はサイト上で演じていたようだ。自己否定を通して自己愛を成就するような屈折した通路を経て、自己存在を確認しようとしていたのかもしれない。濱野智史によれば、2 ちゃんねるには Vipper と呼ばれる集団がおり、自分たちがモテることなく暮らしていることを自虐的ネタとしてネットに書き込んでいる。だが、秋葉原事件の K は、Vipper のように自らをネタとして笑うことで、心に

固着した黒い憎悪を脱色することはできなかつたらしい。メディアの言説の中には、現実の K は「不細工で女にもてず、恋人も友だちもない」男ではなかった、という記述もある。舞台上で登場人物が独り言のつもりで発話していても、役者は観客に向かって発話している。役者にとって観客は、舞台上で自分に命を与えくれる神のような存在である。不細工でもてない男と自称し自嘲しながらも、サイト上の不特定の人々に向かって語りかけることが、K にとってこの上なく重要な行為だった。もし携帯を止められたりしたら、「発狂します」と書き残している。

【4月20日】午後1時55分 欲望に素直になっていいのであれば、繁華街の歩行者天国にトラックで突っ込みたいです そんなことしませんけれどね

【21日】午前0時11分 私は内向的ではありませんよ 後先を考えずに暴走するくらいの行動派です

【24日】午前0時46分 私より幸せな人を全て殺せば、私も幸せになりますか？ なれますよね？

4時21分 きょうも華麗に無視されています 皆さん、私の存在そのものを否定していますよね

40分 雨が降るなんてきていません 地球規模で私に嫌がらせをするのですね

ここでも K は、「不細工でもてない男」という登場人物を演じている。「私の存在そのものが否定されている」という言葉は、現実の総体に対して発する別離と宣戦である。だが、そうした宣言は言葉として発話されている限りは、和解への可能性を隠している。追い詰められながら、役者としてのもうひとりの自分は、サイト上の見ず知らずの人々に呼びかけている。K にとって最後のよりどころが、もしかしたら自分の存在を認めてくれるかもしれないサイト上の誰かであった。舞台上の役者が語りかける観客が、誰だか知らない不特定

の人々でありながら、役者に命を吹き込む神であるように、Kにとってその誰かは自分を救済してくれるかもしれない神であった。現実への激しい否定とサイトの神への期待が双方から押し寄せて形成された稜線の切っ先をたどるとき、サイト上の彼の言葉は不気味な生気を放っている。「私より幸せな人」への視線は、憎悪から発して孤立感へと再帰するとしても。

「私より幸せな人々」への視線は、『ヴェニス商人』では構成として内在化されている。舞台には、ヴェニスとベルモントという対照的なふたつの場所が交互に現れる。ヴェニスは貿易と商取引の地であり、差別と競争と抑圧と権力とが支配し、貨幣がフェティッシュな運動によって人びとをもてあそぶ。ベルモントはファンタジーの国、おとぎの国であり、財産が気前よく使われるが枯渇することなく、善人はあくまで善人であり恋と結婚に恵まれる。ふたつの場所は辻褃が合わなく調和しないため、『ヴェニス商人』は不愉快な戯曲である、とオーデン (W. H. Auden) は言う。観客の想像力にシャイロックの視線が浸透することで、ふたつの場所が比較され世界のグロテスクがあぶりだされる。日本社会において、現実の総体を敵にするほどの孤立に人々が立ちすくむ状況がある一方で、華やかで豊かな消費生活が花束のようにあふれ、そのため不気味なコントラストを生み出しているように。

ユダヤ教徒がヨーロッパにおいて蔑視され差別された歴史をもつにしても、彼らには「神に選ばれた民」としての誇りがあった。テロリストと呼ばれるオサマ・ビン・ラディンさえも、ブッシュの主張に対峙する自己正当化の主張を語ることができた。だが、Kのメールには、負の自己記述しかない。彼が語りかけるメールはいつも不特定の誰かに向けられていたが、返事は少なかつたらしい。それにもかかわらず、秋葉原での無差別殺人の当日に、「車で突っ込んで、車が使えなくなったらナイフを使います。みなさんさよなら」とメールを發し、犯行の直前にもメールを發している。

午前6時4分 ほんの数人、こんな俺に長いことつきあってくれてた奴らがいる

5分 全員一斉送信でメールをくれる そのメンバーの中にまだ入っていることが、少し嬉しかった

トラックとナイフで殺害した人々に対して、彼がもっとも欲していたのは、自分という人間存在を認めてくれることだった。殺害の直前の最後のメールは、「時間です」である。架空の共謀者に向けて合図をするかのように、いやむしろサイト上の神を諦めるためのように。法廷を出る前のシャイロックが言葉を封印したように、Kは言葉によるコミュニケーション、サイトの神に賭ける時間が終わったことを宣言した。彼は暴力によってコミュニケーションを求めた。9.11事件、アフガニスタン戦争、イラク戦争が、暴力によるメッセージの発信であり、コミュニケーションの可能性を破壊するコミュニケーション行為であったように。

#### 引用・参考文献

Shakespeare, William. *The Merchant of Venice*. Ed. John Russell Brown. The Arden Shakespeare. London: Thomson Learning, 2005.

Auden, W. H. "The Shakesperian City" *The Dyer's Hand and other essays*. London: Faber and Faber, 1987.

別役実「演劇における言語機能について」『言葉への戦術』鳥書房、1977.

岩井克人『ヴェニス of 商人の資本論』筑摩書房、1992.

ブルース・ローレンス編『オサマ・ビン・ラディン 発言』鈴木主税 中島有華 訳、河出書房新社、2006.

濱野智史「なぜKは「2ちゃんねる」でなく「Mega-View」に書き込んだのか？」

大澤真幸編『アキハバラ発〈00年代〉への問い』岩波書店、2008.

<http://www.whitehouse.gov/>

[http://office.kyodo.co.jp/feature/akihabara\\_stabbing/2008/06/](http://office.kyodo.co.jp/feature/akihabara_stabbing/2008/06/)

木村朗 編『9.11事件の省察』凱風社、2007.

洋泉社ムック編集部 編『アキバ通り魔事件をどう読むか!?』洋泉社、2008.

確井真史『誰でもいいから殺したかった！一追いつめられた青少年の心理』KKベストセラーズ、2008